≪第 2 分科会≫
貧困観とその変容―今、どんな思想が必要か

自己責任時代の貧困観
―「チャヴ」と「DQN」と貧困差別―

高山 智樹（北九州市立大学）

ジャーナリストのオーウェン・ジョーンズがイギリスの貧困差別を描いた『チャヴ』の冒頭では、下層階級を貶めるジョークに笑うリベラルな友人たちに著者がショックを受けたというエピソードが紹介され「なぜ、労働者階級への嫌悪感がこれほど社会に広がったのだろう」という問題提起がなされている。同じような問いは日本についても発することができるだろう。2000 年代に注目を浴びた反貧困運動は、東日本大震災以降に急速に力を失い、その一方で 2012 年にはメディアを総動員した生活保護バッシングが起こり、また 2017 年には小田原市の職員が「保護なめんな」というジャンパーを着ていたことが大きく報道された。先号の『唯物論研究年誌』でも、ホームレス支援活動を行う奥田知志さんが、「貧困差別が問題視されないのは自己責任論のせいである」と明確に指摘されている。生まれながらの属性による差別が間違っていると考える人が、貧困や薬物中毒など、一見すると努力で克服できるような状況に置かれた個人に対しては冷たい態度を取るような状況は容易に想像できる。「子どもの貧困」が広く注目を集め、「子ども食堂」が全国で急速に広まったのも、「子どもの貧困」には自己責任を問えないからである。実際、「子ども食堂」を運営している人が、「貧しい大人が食べにきたらどうするんですか？」と尋ねられたというエピソードが、SNS で紹介されていた。

もちろん、イギリスであれ日本であれ、過去に貧困差別が存在しなかったわけではない。ジョージ・オーウェルは『ウィガン波止場への道』において、「労働者階級は臭い」と言われて育てられた下層中産階級としての自身の経験を紹介しているし、1940 年代から 50 年代にかけて大学に進学した労働者階級出身の人々（「奨学金少年」）が、進学後に劣等感に悩まされたことは広く認められていた。しかし、イギリスにおいてはそれと同時に強力な労働運動が組織されており、自身の階級帰属に誇りすら持つ労働者階級文化が生み出されてきた。また労働者階級ではなくとも、労働運動に共感を寄せる人々は決して少なくなかった。それに対して、労働運動の凋落と労働者階級文化の弱体化を経た現在では、労働者階級の人々が不可視化される一方で（ポリー・トインビー『ハードワーク』には、その不可視化のあり様が的確に描写されている）、失業手当などでかろうじて生活を成り立たせている最貧困層が、貧困差別の矢面に立たされているのである。

言うまでもなく、日本にも寄せ場に対する偏見は古くから存在しており、民族差別や部落差別にしても、貧困差別を伴うものであったと言えるだろう。また 1970 年代以降は、ホームレスに対する暴力がたびたび社会問題となった。しかし日本のそれは、「高度経済成長時代」の「一億総中流社会」における、貧困そのものの否定であった。現代の貧困差別が昔と異なるのは、「ワーキングプア」や「貧困女子」などの言葉がある程度広まっていることからもわかるように、貧困の存在自体を否定する風潮自体は弱まっている中での、貧困バッシングだという点にある。

異なる歴史を持つイギリスと日本において、現在の貧困バッシングの様相に重要な

違いが存在していることも明らかであるが、バッシングの主たる対象がどちらも失業者であり、あたかも貧困層が社会全体から疎外されていることを正当化するような言説が流通していることなどの共通点も見逃せない。さらに言えば、こうした貧困バッシングの価値観を、当事者までもが内面化しているように見えることも、両国の共通点である。日本でも話題になったケン・ローチ監督の映画『わたしは、ダニエル・ブレイク』では、失業によって尊厳を奪われ、社会に対して異議申し立てをする回路を失った人々の姿が克明に描かれていたし、ブレイディみかこの『子どもたちの階級闘争』からも、「緊縮」以降の貧困地域でコミュニティが急速に弱体化する様子が窺える。そこには貧困を社会問題として捉え返すような視線はほぼ失われてしまっている。日本の生活保護受給者が抱くスティグマについては、詳述する必要もないだろう。

こうした問題の理由として、新自由主義の進行と、それに伴う「自己責任論」の隆盛をあげるのはもちろん正しい。しかし、貧困層へのヘイトスピーチとも言えるような言説の蔓延をふまえると、「自己責任」だけで全てを説明することができるとは考えにくいし、少なくとも自己責任論と貧困差別との回路が十分に解明されているとは言えないだろう。以上のことを踏まえ、本報告では現代の「貧困観」の成り立ちとその固有性について、日英比較を交えながら検討してみたい。貧困問題への取り組みがより一層重要性を増してくるこれからの時代において、新たな反貧困運動を展望する際にも、幾重にも複雑に絡まりあった現在の貧困観を検討する作業は、避けて通れないはずである。